



「直島レポートその①」

瀬戸内海には周囲0.1キロ以上の島が約727島もあるとか、あんなちっちゃい海の中にこんなにも多い島があるなんて少し不思議です。その中のひとつ周囲16キロの「直島」に4月27日行ってまいりました。

讃岐にきて5年になりますが、「直島」に行ったのは初めてでありました。直島といいますと記憶にも新しいと思いますが今年の1月13日に出火し、島の1/7にあたる122haを焼きつくした山林火災の島でもあります。民家や人的被害が不幸中の幸いにもなかったことから、島民の方々は早くから自分の生活をとりもどしてはいらっしゃいましたが、今回直島に行って正直、息をのみました。火の恐ろしさを実感したわけです。

高松港からフェリーで約50分、直島の宮浦港が見え始めるとともに、山林火災の被害にあった山がみえてきました。緑豊かな島というイメージがある直島ですが、目に飛びこんでくるのは黒こげになった山肌と炭化した木々と赤茶けた木々（火が山肌をなでただけでも松などは枯れてしまうそう

です）火は直島の西から東に動き緑の山を焼いていきました。山火事とはいえ民家のすぐ近くもう手が届くほど、距離にして1mほどのところまできていた場所も少なくありません。そして今、民家のすぐ上に焼けた痛々しい黒い山がひろがっています。地元の方に何うと1月13日は「火が風にあおられ、まさに獣のようだった」と言われました。風は火の力を強め、数百メートルも飛んでいくのですからまさに赤い獣が山を走ったように感じたに違いありません。

この春から直島グリーン大作戦がスタートし5年間で35haの植林活動が決定しています。この植林活動が大変な作業になるそうです。ただ山に木の苗を植えたらいいというのではなく、まず山の持ち主の方に承諾をもらいそして焼けた山に残っている木を全て伐採し山肌を平な状態にしていきます。これが「地ごしらえ」この「地ごしらえ」が本当に大変、きちんと整備された山にはじめて、ボランティアの方の手によって木の苗が植えられるそうです。ひょろひょろとした頼りない木の苗が大きく育つ



焼けた木々



何も無いところに植林です

つもちゃんの

ドコ
バタ
ラジオ日記

まで早くても10年はかかるそうです。一夜にしてなくなった緑がもとの姿にもどるまでにどのくらいの時間が必要なのでしょう。島にくるまでは、山林火災について記

憶がうすれていた私。「他人ごととおもいがちな災害、体験をしたひとでなければすぐに忘れてしまうのが災害」自分自身もその一人なんだと感じた一日でした。

「直島レポートその②」

島を歩くと島民の方が気軽に声をかけてくれます、調子にのっていつもにましておしゃべりになってしまうのですが、これも島ならではののかもしれません。直島は近代的な面と昔ながらの古き日本がまじわる場所のような気がします。

そんな直島に魅せられ、移り住んでカフェまで開いたという女性がいます。埼玉県出身の大塚るり子さん。大塚さんが本村地区でカフェをオープンさせたのが今年の3月末。築30年の民家を改装し「まるや」という屋号をつけました。直島の人も土地も海も美術館も大好きで、直島で暮らそうと思ってそれを実際やってしまったという31歳です。最初は観光客の方を当てこんでい

たのですが、島のおばちゃんや漁師さん、小学生の子供たちまでお客さんという客層の広さ、島の憩いの場ともなっています。

「まるや」さんの入り口は庭の縁側にあります。ガラガラと音のする横開きの戸を開けるとカフェ空間が中はなかなかオシャレです。ライトもオブジェも雑貨メーカーに勤めていた大塚さんならではの感覚でゆっくりくつろげます。敷地内には地元のお母さん方のケナフ工房もありまして、直島に女性の新しい風が吹いているそんな気がしました。本村地区をぶらぶら歩いていると必ずみつかります。いごごちがなかなかよいです。ぜひ訪ねてみてください。

